

< 翻 訳 >

ジョン・バトラー・イエイツ

[著]

『アイルランドとアメリカからのエッセイ』

当世の女性

——興味深い新しい女性像について——

日 下 隆 平
藤 居 亜矢子 訳

エリザベス女王は恋多き女性であったが、決して本気で恋に落ちることはなかったと言われる。だからこそ、従姉のスコットランド女王メアリーに勝つことができた。メアリーは、気の毒なことに、激しい恋の虜になってしまったのだ。¹ エリザベス女王は、歴史書では強大な権力をもつ人物²である。当時としては、極めて希有な資質の女性であったが、今の世ではごくありふれた存在と言える。

この今までにない^{タイプ}の女性を輩出したのは、アメリカだった。この国のすべての出来事がそうである様に、この種の女性は我々の目の前に忽然と現れた。まるではっきりとした先祖、それどころか親など存在しなかったかのよう

に。

このような女性の数は少なくとも、見つけたのはさほど困難なことではない。というのは、とても活発で至る所に姿を現すからである。また、この女性の特徴を述べるのもさほど難しいことではない。時間をかけて自分のことを語ってくれるからだ。第一に、雄弁家と同じ様に、その資質は天性のものというより後で身についたものである。事実、そのような女性には、雄弁

家じみたところがありいつも友人に対しどんな時でも熱弁をふるい自分の考えを説明し押しつけようとする。また自らを向上させることに熱意を燃やしている。ところで、向上といっても何をするのだろうか、人は尋ねるかもしれない。だが、それは当の本人にも分かっていない。その一方でその女性は個人の完全な自由——道徳的、肉体的、精神的、政治的な——を主張するのだ。この種の女性は拘束されるのを嫌い女性的感性、つまり男女という性差から脱しようとする。というのは、感性、性差のいずれも、女性を男性に服従させるものであるからだ。そんな女性が恋愛に憧れても、その対象となるのは、とうてい実在するとは思えぬ完璧無比な人物でなければならない。並の男などみんな分別がなく尊敬に値しないのだ。そればかりか、そんな男は女性の自由を奪う者となるだろう。女性の母親たちは、愛と義務による生き方を望んだが、これらは母の生きた世界が不幸にも未熟であるがゆえに、必要とされたものだった。それに対して娘は完璧な恋人と純粋な愛によって心が満たされた。同時に、自由に生きようとしても、自分が商業社会の一員であることを忘れてはいない。それゆえ、実業家のように結果を重んじ、「何事にも、全力を尽くそう」という信条をもっていた。

青年は、自由というものがキマイラ³のように恐ろしいものだ知っている。つまり、自由が、見る者の目を決して和ませるものでないことを。万事が妥協という状況の下、彼らが生きることが、刻苦勉励、服従、不断の努力をすることだった。そこでは正直さえ、必ずしも最良の策とはならないのである。だから、成功と金もうけを望んでも、幸運と好機がなければどんなに氣力が充実していても実現しない。女性と異なり、この青年たちは、夢を持っていた。なぜなら、夢とは労働の疲れを癒し無聊を慰めるものだからである。青年がいつも第一に話すのは、成功と富を得るという夢であった。そして、容易に話せない、もうひとつの夢があった。それは、いつの日か自分が選んだ女性と結婚するという夢である。

若者たちの間に見られるように、ここアメリカではアメリカ流の生き方がある。規律を守られる男性は、その反動から夢想家になっている。その一

方で女性は意気盛んで自分本位であり、夢など一切持ちあわせていない。例えば、少女たちが背のびして自由を求めたとしよう。教師を選び好みしたり罷めさせる権利はないにしても、彼女たちは興味を失なうと何もかも放り出すとすれば、その自由とは一体何なのだろうか。周囲に大切にされてきたので、彼女たちは他人を優先することを学んでこなかった。奉仕と犠牲という甘美な労苦を強いる女性本来の声の内面から呼び留めようとしたが、耳を貸さなかった。「本来の私になろう。自分に忠実な人生を送らなければならない」という新たな決意を繰り返す自分の声を聴いたからだ。彼女は大人になり社交界に出て男性に知り会くと、非常に明確な目標を持ち、それに向かってまっすぐ進むのである。彼女には、男性に仕える気持ちなど露程もなくそれどころか男性を仕えさせようとする。「アメリカの女性は興味深いが、男には魅力がない」と無神経なほど無礼極まりないイングランド男性が私に語ったことがあった。彼の考えでは、女性に対して優位に立てない男などは、哀れな存在なのだ。

イングランドの淑女たちは、進歩的なアメリカ女性が好きではない。アメリカ女性がイングランドの男性どもに評判がよいのは、耐え難いことなのである。その一方で、イングランド女性はアメリカ女性を羨ましく思っている。男性どもが、今までと異なるやり方で、女性に仕えているからである。これはまさしく、イングランドの男性のように、現代のアメリカ女性が自分本位であるからだ。イングランド男性の理解する利己主義は、いつも彼らの尊重する信条であり実践であった。こんなことから、女性が率直なまでに自分本位であることのおかげで、男性からすれば考えが手に取るように分かるので、与し易い女性がようやく現れたのである。もはや、女性は、昔のように謎めいた存在ではなく、子供のパズルのように単純なものなのだ。女性の新しい利己主義は節度あるものではないため、男性が一人の力で支援してやれるようなものではないが、それでも、彼らを喜ばせるのだ。なぜなら、仕事において勝たねばならぬライバルとの日々の競争とよく似ているからである。目の前にいるのは美しい敵であり、男性は彼女に勝利し、捕らえ、戦いの褒美

として連れ去らねばならない。家庭の飾りもの、眼の保養になるだけでなく、彼の廷臣にして崇拜者、そして妻となるのだ。彼女の行き過ぎた利己主義に關しては、男性として異なる分別を教えれば、従順さを取り戻し、女性としての役割を演じ、イングランド人らしい妻となると考えている。仮にそれが無理であっても、自分が完璧に理解し、扱い方を心得た女性が家の中に居ることはなんと好都合なことだろう、と思うのだ。もちろん、仕事の場と同じように家庭においても理性的でいられるのだ。かつて、女性はこの世で最大の神秘であった。男はそんな女性を無視するか、優しく接するか、屈するか、強い意志で圧倒するか、のいずれかであった。だが、理解することはできなかった。誰にもその謎を解くことはできなかった。喜劇作家も非劇作家もみんな、この謎に取り組んだ。風刺作家と機知に富む人間は、この魅惑的なテーマに決して飽きることはなかった。だが、すべて推測でものを言っていたのである。あえて女性を知ろうとする者はいなかった。特に夫はそうだった。妻たちの首をはねたヘンリー 8 世でさえ、知り得たのは最後の王妃（訳注：キャサリン・パーのこと）だけだった。⁴ 男にとって女性とはそのような存在だったのである。現代では女性は昔の暦と同じぐらい分かりやすい。颯爽とニューヨーク五番街を闊歩する女性の姿を見るとよい。なんと輝いた眼をしていることだろう。それでいて宝石のように冷たく見えるのだ。微笑みすら冷たく見えることか。その姿はまるで若き運動家のようである。正装していようが思い思いの着飾り方をしていようが、スキがなく機能的なのはほとんど軍服のようだ。彼女はまさに活発な態度と自由な意志そのものを体現している。だが、魅力的なありとあらゆる輪郭は消滅し、女性の姿はもはやゆったりとした優雅さで波形を描くことはない。もはやネコのようにしなやかでもなく、シカのように軽やかでもない。愛おしむ対象でもなくなった。というのは彼女の声は、その服装と同じで妥協の余地がないからだ。普通の男は、どこかの魅力的な女性に魅了されるまでは、名門校出身の紳士か、高位の貴族、又はアイルランドの農民でもない限り、女を喜ばせる手練手管をたいがい軽蔑してきたものだ。現代女性は男に知識を授けることを止め、男性の真

似をし始めた。その結果女性の態度は羽振りのよい実業家と変わらぬほど、男が一目置くものとなった。かつての謎めき、捉えがたく、隠された存在という三重ものの魅力は果たしてどこに消えたのだろうか。女性たちはその魅力の下にベールに被われるようにその力を隠すのを常としていた。その魅力は今どこにあるのか。勝利を得た女性に対し、多くが頭を垂れているが、詩人はその中にいるのか。天文学者、数学者、科学者、実業人、法律家、特に法律家は、現代女性の言いなりになっているが、美しい調べが詩人から生まれることはない。そんなことで女性は幸せなのだろうか。

自分本位であることは男性、女性、どちらにとっても不幸である。タレーラン^はは、ナポレオンのことを「面白味のない人」と呼んだ。かつては男性が自分本位で、仕えるのは女であった。女の言い分に「私たちの使命は男性を喜ばせること」とあったからだ。一方で、女性には全てを支配する魅力と同時に、動かしがたい幸福が存在していた。幸福とは無私になることだからだ。男女を問わず幸せであることは、いつの時代であろうと、人の目にも神の目にも素晴らしいことなのである。

幸福とは詩人と女だけに授けられた奥深い知恵である。女だけが詩人にその知恵を授けることができた。男、特に成功した男は、そんな知恵は露ほども知らない。なぜなら、何もかも危険にさらし、ほとんど全てを失いかねないからだ。成功の下には、たいがい、反感がある。悲しみや惨事が、いかに人の品位を下げることか、みんなが知っている。男はふさぎ込んで辛らつになるか、悲しいほど無口になる。そうでなければ、酒浸りになり、下卑た人間に成り下がる。一方、女の場合、惨事の中に好機を見出す。男の場合とはかく、女の人生につきまとう悲しみは、将来の知恵を願うために、女らしさをただ単に強調する。女がはっきり区別するのは、幸福か不幸かのみであり、それ以外ではいかなる違いも認めることはない。完璧なまでに心が満たされている人として、ふたりの人物だけが挙げられる。ひとりは、家事仕事に勤しむ女性であり、もうひとりは詩作に励む詩人である。ふたりには、人知れぬ神秘がありそれを分かち合っている。詩人は家庭生活を、女性は詩歌

の何たるかを知らないにせよ、両者はひとつのパンを分かち合う、仲の良い仲間なのだ。確かなのは、女性は生まれながらにして鳥のような存在で翼を持っている、ということである。少女の頃はまさに飛ぼうとして翼を広げている鳥に似ている。大人の女性になると、まっしぐらに急いで飛ぶ鳥のようである。望みが翼を与え、女性の心中に創造への衝動をかき立てる。そして、何事も幸福に向けて力強く飛ぶのを止めることはできない。女性には創造力に富む才能がある——その目が輝くところではどこでも幸福になれる。触れるものは何であれ「神々しい錬金術」で金色に光らせることができるのだ。

意思堅固な現実家は、幸福などという考えを放棄し、それに代わるものとして快楽を求めた。快楽は感覚、そして変化や動きに対する抑えきれない渴望を満たすものとなる。このような満足感、その気になれば、努力せずとも断念できるものだ。——単なる快楽は空しいものである。一方、他の存在が自分を不安にすると現実家は感じる。それは詩人だと言うであろう。女性には快楽など信じていない。信じるのは幸福だけである。幸福をこの上なく信じるのが女性の本質なのである。この信条に目覚めるのは恋をする時か、子供を産む時で、その後は彼女にいつも付きまとうものとなる。思うに、このことは想像を絶するほど女性が自分本位な考え方をすること、そして、夫と子供がいる女性には奇妙な冷淡さがあることの説明となるのではないか。女性がいるところで、我々はいろいろなことを話し合い、あれこれを行う。女性はその様子を見守っているが、その目には知識と直感の光がある。

男は労働もすれば、戦もした。懸命の努力で進歩という戦車を押し進めるものの、車輪に轢かれて一命を落とすと、人々は悲嘆に暮れた。だが、女性の場合は、希望の歌と哀愁を帯びたパレードによって、墓地まで運ばれる必要がある。他の音楽では、思い出を傷つけることになるだろう。女性の神秘について、男は話し、議論することがあるが、私はうんざりする。女性は相手をじっと見つめると、おそらく微笑むものだ。それはまるで手を触れ合うことによって、自分の失うことのない希望を伝えるかのようだ。決して言葉を用いることはない。だから我々男は言葉で女と争ってはならないのである。

遠い昔、人々はよく貴婦人の目について語ったものだ。古代ギリシアのホメロスが、大きく丸い目をしたユノ⁶と空色の目をしたミネルヴァ⁷を詩で賛美したことはよく知られている。現在の貴婦人の目は輝きと厳しさばかりが目立ち、雄弁な語りと説得力が感じられない。また、他を圧するような態度のために、昔の女王のような存在でもない。そればかりか、優れた技能を持つので、奥ゆかしさも持ち合わせていない。自分本位の人間になることで、我々男性と同じ水準にまで落ちてしまった。今では、我々の仲間の一人である。

だが、今の世に相応しい女性がなんとかぎりぎり間に合って登場した。そんな女性が求められるのは、世の男どもが紳士でなくだらしないからだ。15年ほど前のある日曜日の朝のことだった。ロンドン郊外にあるキュー橋⁸で、奇妙な光景を目撃したことがある。5人の若い女性が一列に並んで自転車に乗ってやってきた。女性たちはブルマー⁹を穿いていた。この光景は道端に立っていた浮浪者や混血児たちの嘲笑をかった。その中の一人が何か言ったが、何と言ったのか私には分からなかった。しかし、最後尾の女性には聞こえ、それを理解したようだ。その女性は立ち止まり、自転車の位置を合わせて歩道の縁石に立てかけた。そして、若者のところに戻り、「なぜ失礼な言葉を言ったのか」と尋ねたあとで、その若者を平手打ちした。おそらく、力が強かったからというより、むしろ、驚いたためであろうが、若者はひっくり返った。彼は恥ずかしそうに立ち上がって埃を払うと、仲間たちもきまり悪そうに笑っていた。一方、その女性は再び自転車に乗り、友人たちの後を追った。これが今はやりの新しい女性だ。この場合、大人気ないが効果はあった。しかし奇襲戦でもない限り、少々無礼すぎよう。柄の悪いことで知られるベルファスト¹⁰では、みんなが他人の上に立とうとする。それでもベルファーストで無理なら、ニューヨークや他の土地で自らが「支配」できる女性を今も見つけることができるのだ。このことは、男としての存在に、充実した満足感を与えるのである。一方で、パブリックスクールで教えている若い女性たちは新しい女性たちの力強い生き方に共感を寄せて見守っているのだ。

今日では、女性の運命は常に男性に左右されるものと述べるのは女性に対する侮辱となる。我々には、この発言が男性の運命もまた女性に左右されるものだというのと全く同じであることが分かっている。男女は互いに折り合いをつけねばならない。男性は女性に平等と尊厳を譲り、女性の方は男性に優しさで報いなければならない。だが、実際には、そのような交際を男女間に見ることはない。女性は従来女性に特有の知恵をもたらすが、それは生き方を長く究めてきたことから生まれたものである。男性は活力をもたらすが、それは生計の立て方という問題を長く究めることで生まれたものだ。「現在のことは忘れて、未来のことを考えよう」と活力が男性に言わせると、女性は答えるだろう。「今を楽しみましょう。若くないのですから。子供達が幼い頃はすばらしいものよ」と。

人々は忘れているのか、知らないのである。人間は自由を好むが、それ以上に束縛を望むものだというのを。心の持ち方で、自由と束縛の両方を手に入れることができるのだ。あらゆる願望は互いに抑制しあうものだが、それらの願望を満たすことが幸福なのである。希望は記憶によって制限され、肉欲は愛と思いやりによって自制される。この点にこそ、最も豊かな調和と完全に自由とも言える隷属状態がある。快楽は欲望を満たすが、度が過ぎると、嫌になり、飽き飽きすることになる。快楽が知性を圧倒し、沈黙させるのに対して、幸福は知性を至上の存在にする。幸福は自発的に規律を守らせるが、快楽は緊張を解くことによって、放埒を促すことになる。このことは、自由に翳りをもたらすものとなり、最後には自由を失うものになる。

高潔な人物が世界を救うと言われる。このことは、世界を理解し守り続けるには、強い意志を持つ人物が必要ということだろうか。もしそうだというなら、私は遥かにもっと偉大なものを知っている。それは人間の複雑な個性全体から生じる豊富かつ多様な知識であるが、それはオーケストラ中の各楽器が織りなす音のように、意識内で形を成していく。その結果、優れた民主主義では、市民全員の権利が守られるように、ひとつの願望であっても、「発言の機会を拒まれる」ことはない。ここにおいて、私たちはシェイクス

ピア¹⁾や優れた女性による、恵み深い知識を手にするようになる。そうさせたのは、慎重に幸福を探すことによってであった。女性が、^{しやく}笏をもつ美しい女王のように、家の中や友人や隣人の間を歩き回るとき、幸福は、心の炎をかき立て、美しい女性の瞳を輝かせるのである。何故なら、みんなが様々な欺瞞にあって常軌を逸するような世界において、この女性は人間の幸福とその可能性に関する真理を純粹に体現しているからである。すなわち、知恵は力に勝り、力にとって代わるものなのである。

原題：“The Modern Woman: Reflections on a New and Interesting Type”

(初出。Harper's Weekly, 1911)

利用したテキストは以下のものである。

Yeats, John Butler. *Essays: Irish and American*. Dublin and London: The Talbot Press Ltd., 1918.

注

1. ふたりは、奔放な恋に生きたメアリに対して、君主として帝国の基礎を築いた女性エリザベスという対比によって、本や映画など多くで描かれてきた。メアリは、5歳のとき、フランス王子フランソワの婚約者としてフランスに渡り、フランス宮廷で少女時代を過ごす。夫がフランス国王に即位したとき、彼女は17歳の少女だったと言われる。夫フランソワの急逝後、メアリは、故国スコットランドに帰らざるをえなくなった。スコットランドに帰国した後、メアリは、イングランド貴族ダーンリ、イタリア人秘書官、貴族ボスウェルなどと恋をする。1587年、恋に生きた女メアリは44歳にして、断頭台の露と消えた。一方エリザベスも生涯を独身で通したものの、ロバート・ダドリー卿、ウォルター・ローリー卿などと恋の噂が絶えなかった。
2. 原文中の“a monster”はスコットランドの宗教改革家ジョン・ノックス (John Knox, 1514-72) の次の言葉を反映したものか。“It is more than a monster in nature that a woman should reign and bear empire over man.” (*The First Blast of the Trumpet against the Monstrous Regiment of Women*, 1558).
3. キマイラ：又は、キメラ (ギリシア神話)。ライオンの頭・ヤギの体・竜また

はヘビの尾をもち、口から火を吐く怪獣。二面性を持つものの比喩としても用いられてきた。

4. ヘンリー 8 世 (Henry VIII, 1491-1547) には、6 人の妻がいたが、アン・ブーリン、キャサリン・ハワード等がロンドン塔に送られ処刑された。最後の王妃キャサリン・パーは有能な女性として知られ、ヘンリーが不在の際には摂政として国政を任された。
5. シャルル＝モーリス＝ド＝タレーラン・ペリゴール (1754-1838)：フランスの、フランス革命期・第一帝政期の政治家、外交官、伯爵。憲法制定国民議会議長、のち、ナポレオンの侍従長を歴任。ナポレオンの没落後、彼はルイ18世の外相としてウィーン会議に出席し、フランス革命前の状態への王政復古を主張した。政権交代の激しい激動の時期にもかかわらず、フランス革命～7月王政期まで政治の中心に続けた。敏腕政治家、外交家としての評価が高い。
6. 原文では 'x-eyed Juno' となっているが、ホーマーは『イリアス』で、'ox-eyed Juno': 「丸い大きな目をしたユノ」と表現しているので、これに従った。また、ユノは、Jupiter の妻である。光、誕生、女性、結婚の女神。ギリシアの Hera に当たる。
7. ローマ神話でミネルヴァは、知恵・武勇の女神。ギリシア神話の Athena に当たる。
8. キューブリッジ (Kew Bridge)：ロンドン郊外キューガーデン近隣の橋。1759年完成し1903年改築された。
9. ブルマーとは女性のゆったりとしたズボンのこと。その名はアメリカ女性解放運動家アメリア・ジェンクス・ブルマー (A. J. Blומר, 1818-1894) の名にちなむ。考案者はエリザベス・ミラー。
10. ベルファスト：英国北アイルランドの首都。造船所で有名。「タイタニック号」を建造した場所としても知られる。
11. ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616)：エリザベス朝の劇作家、詩人。『マクベス』、『ハムレット』など四大悲劇を含む38編の戯曲、『ソネット集』など多くの作品を手がけた。

<解 題>

ジョン・バトラー・イエイツ〔著〕

『アイルランドとアメリカからのエッセイ』

日 下 隆 平

著者は20世紀英語圏を代表する詩人ウィリアム・バトラー・イエイツの父親としてよく知られるが、同時に肖像画家、挿絵画家、エッセイストとしても有名な人物である。20世紀初頭イギリス文壇の中心にあったエズラパウンド (Ezra Pound, 1885-1972) は、ジョンが息子に宛てた1911年から1916年までの書簡を編纂した。¹ パウンドほどの人物が青年時代とはいえ、書簡の編集をしていることを考えてみるだけでも、ジョンが画家だけでなく、文筆家として高い評価を受けていたことが頷ける。その本の序文でジョンの文体と思想について、パウンドは次のように述べている。「その文体は散文として決して優れていると言えないが、文体のリズムと偶発的に生じる押韻によって、恰も夢の中で語られているような雰囲気醸し出している。ゆったりと、夢と生の中をたゆたうような感覚が彼の深遠にあるものを引き出すものとなるだろう」。(以上、要約) このパウンドの指摘はジョンのエッセイの特徴をよく捉えたものである。

このエッセイ集にはジョージ・ラッセル (AE 又は A. E., 1867-1935) の序文とともに、ジョンの6編からなるエッセイが収録されている。これらのエッセイは、主として『ハーバーズ・ウィークリー』などアメリカの雑誌に掲載されたものである。タイトルを『アイルランドとアメリカからのエッセイ』と訳したのは、これらのエッセイがいずれもアイルランドとアメリカからイングランドを語る内容となっているからである。また、近年ラッセルについ

て言及されることはそれほど多くないが、彼はアイルランド文芸復興運動の中心人物のひとりである。ジョンの息子のイエイツとラッセルは年齢が近く美術学校の頃から旧知の間柄であり、初期の作品、『影深き海』ではラッセルの意見を取り入れたこともあった。アベール座運営で見解を異にして一時は疎遠になったが、ラッセルの死に際して、「もっとも古くからの友」とイエイツは弔意を表した。後に、イエイツは『オックスフォード現代詞華集 1892-1935』の撰者を任された時、ラッセルから7編（100-7）を選び、彼を高く評価した。ラッセルはこの巻頭文の中で、ジョンについて「自然のままに生きること」を信条とした人物であり、その人間的魅力は「天が与えた最高の贈り物」であると讃えた。その思想は孔子の思想を好んだパウンドとどこか重なる部分がある。

ジョンのここに集められたエッセイは、国民性、或いは民族の特徴を含めた広い人間観、新しい女性像、芸術論に関するものである。発行年は1918年のことであり、ダブリンとロンドンから同時に発行され、同年再版されている。この年は、イースター蜂起の2年後であり、シン・フェーン党が4分の3の議席数を獲得するなど、アイルランドのナショナリズムがピークに達していた。つまり、イースター蜂起、アイルランド独立戦争などが続き、アイルランド自治問題が最大の民族的関心となった頃である。史実をみる限りでは、このすぐ後にイギリス・アイルランド条約が批准され、その条約をめぐる市民戦争が行われた時期である。アイルランド自由国成立直前の混迷状態であった。ところが、このエッセイで、ジョンの筆致はきわめて冷静であり、ひとりの思想家としてのスタンスを失うことがない。この作品の最大の特徴を一点挙げるとすれば、高揚したナショナリズムがまったく感じられないことであろう。著者がすでに渡米後であったことを割り引いても、それは同様である。。著書の内容は、芸術、女性論、文化そして人間論についてのエッセイが主であり、急を告げる政治課題と乖離したテーマが、何か当時の現実にはそぐわない気がするの私だけの印象だろうか。実は、この点にこそ、この著書の置かれている立場の核心があるように思われる。ラッセルはその序

文で、「いつも心を刺激し自ずと思索に向かわせる、ジョンの話し振りを思い出す時、読者は彼の深い思想に思い至る。ただ、それは何気なく語られるために、ややもすると読者はその深い意味を見落とすことがある」と述べている。この言葉はジョンの思想を緋くヒントになりはしまいか。何気なく書かれた文の行間にこそ、ジョンの深い知恵が感じられる。また、もうひとつの興味深い点は、19世紀末のアイルランド人という視点からみたイングランド人像、またはアイルランド人の自己意識である。さらに言えば、イギリス系アイルランド人（アングロ・アイリッシュ）の自画像であろう。以下、各章を簡単に要約しておく。

第1章 サミュエル・バトラーの思い出

『エレホン』、『万人の道』でよく知られる作家サミュエル・バトラー（Samuel Butler, 1835-72）に関する回想である。ロンドンのヒーザリー美術学校で、ジョンはたまたまサミュエル・バトラーとともに修業時代を送った。ともに年嵩の学生であることから、画学生として親しくなった。このエッセイで興味深かったのは、植民地の出身のジョンと宗主国でも貴族階級に属するバトラーとの関係であった。つまり、19世紀のイングランドで、イギリス系アイルランド人が宗主国イングランドと植民地アイルランドに対してどのような帰属意識を持っていたか、という点であった。「バトラーは頭からつま先まで上流階級のイングランド人であった。上流階級のイングランド人は、信仰、妻子、財産、そして名声さえ手放したとしても、そのことで臆することはないだろう。彼らには階級への自尊心が心底身についている。アクセント、表現、身振り、言い回しに、階級を表す痕跡^{しるし}を入念に残している」。そのバトラーに数年後ロンドンで偶然会うことになった時のジョンの感情には、イギリス系アイルランド人の複雑な心情が感じられる。また、この回想は、W. B. イエイツの『幼年期と青春期の回想』（『自叙伝』）と重ねて読むと、ラファエル前派の画家たちとの親交があった頃の日々で、親と子の両面が見えてくるため興味深い内容となる。

(*The Seven Arts*, 1917)

第2章 故国を思って

アイルランドでは、子供に対して、学校教育より家庭教育が強い影響力を持っている。これは、イングランド貴族がパブリックスクールなどの教育を重視するのと全く逆の現象といえる。アイルランド人は、学校以外の場所で多くの知恵を学んで成長する。アイルランド人の誇りは、自分が非凡で他民族とは違った存在と思うことである。私たちが好きなのは、人間性そのものなのである。だから、人間性があふれ出る会話は至上のものなのである。アイルランドとイングランドの民族性、文化とを比較する中でアイルランド人的なものがイングランドに必要なことを述べたものである。「シングとアイルランド人」と並んで民族主義的香りが多少感じられる内容である。

(*Harper's Weekly*, 1911)

第3章 イングランド人が幸福なのはなぜなのか

——或るアイルランド人から見たイングランド人気質——

或るアイルランド人から見て、イングランドとフランス双方の人々にみる思想や価値観の相違を述べたエッセイである。フランス人は生まれながらにして優れた才能、教育、知性を備えているのに対して、イングランド人はこれらを欠くため、賞罰という手間のかかる方法で教え込む必要がある。それ故、鞭に打たれて教育され、厳しい規則と法の遵守によって、理性ある人間というより、よく訓練された存在となる。地理的条件そして歴史がイングランド人の行動様式に与えた影響などを踏まえて、フランス人とイングランドの人々の思考法を較べながら、イングランドの特殊性を示そうとしたものである。

(*Harper's Weekly*, 1907)

第4章 シングとアイルランド人

滑稽なアイルランド人、つまり、深刻ぶらず、笑いをとって生きる道化者というのが、イングランド社会におけるアイルランド人のステレオタイプであった。シングの劇は、これとは全く対照的なアイルランド人像を示している。アイルランド人の性質には、精神と詩情あるものへの向かい、宗教的な神秘を糧に豊かな想像力を育んでいく。アイルランド人のような生き方を見直し、必要とする時期が来ている。すでにそのような兆しがニューヨークのような文明社会に現れている。ニューヨークに住む、若い女性が話してくれたことだが、アイルランドに行った時の最大の楽しみは、長い冬の夜にかまどの火を囲み、訪ねてきた隣人たちとおしゃべりをするということであるという。このような温もりを絆のない文明社会は必要としている。マッシュウ・アーノルドを彷彿し、ケルト復興の残滓がうかがわれるエッセイである。

(*Harper's Weekly*, 1911)

第5章 当世の女性：興味深い新しい女性像について

19世紀末によく目にするようになった「自信に満ちた女性」について述べたものである。こうした新しい型の女性を世に生み出したのは、アメリカだった。この男性的な女性の特徴を述べるのもさほど難しいことではない。その資質は、天性のものというより身についたものだからである。このような女性が出現したのも、世の男どもが紳士でなくなりだらしないからだ。しかし、女性と男性の資質は根本的に異なる役割を持っている。従来、女性には神秘が宿り、詩人に授けるような知恵を持っていた。今はそのようなものが消え去り、女性は男性と同じ方向を目指している。著者によれば、男性と女性は資質を異にすることから、役割も違うのである。それ故、女性が本来持つ知恵を目指すべきであることを述べている。すなわち、知恵は力に勝り、力にとって代わるものである、ことを。

(*Harper's Weekly*, 1911)

第6章 G.F.ワッツと芸術の方法

ジョン・イエイツはダブリンの法廷弁護士からロンドンへ行って肖像画家の道を進んだ。彼に転身のきっかけを与えたF.G.ワッツについて書いたものである。ワッツは「イングランドが生んだ最も偉大な肖像画家」であるとともに、壮大な宗教的テーマに取り組んだ画家であった。この文はダブリンで開催された王立美術院主催のワッツ展における記念講演である。それだけに、肖像画だけでなく、『愛と死』、『時間、死、審判』、『イヴの誘惑』、『イヴの悔悟』、『カインの悔悟』など、ワッツの宗教画についてジョン独自の解釈が書かれていて興味深い。ジョンは、ラファエル前派の影響を受けるが次第に肖像画家として生きていく。ジョンはワッツへの思いを語る一方で、絵のモデルと画家との間に必要なもの、また、彼自身の肖像画や絵画全般についての考え方も披露している。エッセイ集で白眉と言える。

(1907年 Royal Hibernian Academy 講演)

注

1. Yeats, John Butler. *Passages from the Letters of John Butler Yeats. Selected by Ezra Pound.* Dublin: The Cuala Press, Churchtown, Dundrum, 1917.

図1 *Self-Portrait*
『自画像』(1922年)

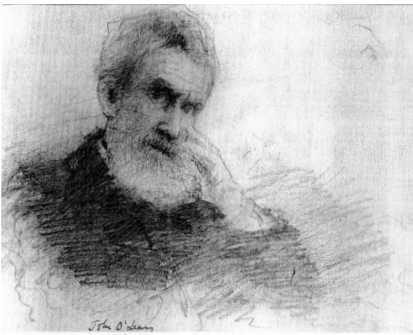
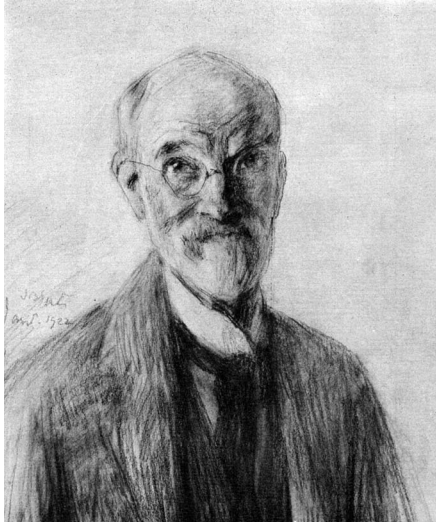


図2 *JOHN O'LEARY AT THE CONTEMPORARY CLUB*
Pencil on paper
『ジョン・オリアリー』(1894年頃)

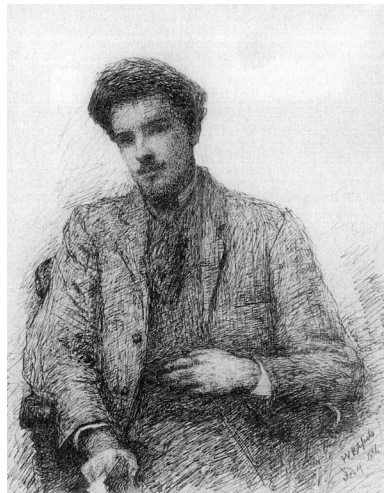


図3 *W. B. YEATS AS A YOUNG MAN*
Pen drawing
『青年時代のW. B. イェイツ』
(1886年)

図1 ジョン・バトラー・イエイツによる『自画像』1922年（以下より収録。
Gordon, Robert. *John Butler Yeats and John Sloan: the Record of a Friendship*.
Dublin: The Dolmen Press, 1978.）

図2 ジョン・バトラー・イエイツ『ジョン・オリアリー』（1894）

図3 ジョン・バトラー・イエイツ『青年時代のW. B. イエイツ』（1886）

以上2点は、以下より収録した。

Yeats, John Butler. *Letters to his Son W. B. Yeats and Others 1869-1922*. Ed. Joseph
Hone. London; faber and faber, 1944.